



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第三二二号〕

立夏りっか

五月五日

目に見えないもの

暦の上での夏、立夏を迎えました。内宮前は周囲の山々のみずみずしい新緑に包まれています。自然界には新たな季節がめぐってきましたが、人間界は新型コロナウイルス、「目に見えない敵」との闘いの真ただ中です。

「目に見えないもの」。私たちの周りには、ウィルスだけではなりません。昨年、「伊勢市アーテイス・イン・レジデンス」という事業で、イギリスから来勢したアーテイスたちと交流する機会がありました。そこでは、イギリスのアーテイスから「日本人は、おさい銭やお守りなど、目に見えないものへの感受性があるが、それはなぜか」という質問が出されました。

確かに、伊勢神宮をお参りしても、神々を見ることはできません。私たちは見えないものに手を合わせているのです。平安時代末の歌人で、僧侶の西行法師が内宮で詠んだという歌にもあらわれています。

何事のおはしますをば知らねどかたじけなさに涙こぼるる

(どなたさまがまつられているかはわからないけれど、

ありがとうございましたにただ涙がこぼれてくる)『西行法師歌集』

それは洋の東西を問いません。子どもの頃、誰もが読んだ『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ著)にはこんなセリフが繰り返してきます。「大切なものは目には見えない」、「本当に大切なものは、このなかに入っている目に見えない何かなんだ」と、フランス人のサン＝テグジュペリは指摘しています。

目に見えないものを恐れ、敬ってきた感性、それは、伊勢神宮のおひざ元である伊勢では忘れてはならないことではないでしょうか。

文 千種清美

